

シンポジウム 「歴史からの問い／歴史への問い—二宮宏之と歴史学」 はじめに

工藤 光一

2007年3月に刊行された『Quadrante』第9号では、二宮宏之氏の追悼特集「歴史家二宮宏之の思想と仕事」を組んだ。およそ200頁という大きなヴォリュームになったその追悼特集は、単に生前の二宮氏を偲ぶよすがとなったばかりでなく、二宮氏の仕事をどう継承してゆくかと思いをめぐらすことへの促しを少なからぬ読者に与えたのではなかろうかと想像する。その追悼特集から4年後の2011年、全5巻にわたる『二宮宏之著作集』が岩波書店から刊行された。ほぼ全集と言ってよい内容を持つこの著作集の刊行によって、われわれは、20世紀後半の日本の歴史学においてその革新を主導した一人である二宮宏之という傑出した歴史家の仕事と思想の全体像を再検討するうえで、このうえない資料集を手になすことになった。著作集全5巻の刊行が完結を見たのを機に、二宮氏の仕事をどう捉え直し、どう継承してゆくかを議論するために、東京外国語大学海外事情研究所と日仏歴史学会の主催、岩波書店の後援で、2012年6月2日、東京外国語大学府中キャンパスにおいて、シンポジウム「歴史からの問い／歴史への問い—二宮宏之と歴史学」が開催された。ここに所載するのは、このシンポジウムの記録である。

このシンポジウムでは、『二宮宏之著作集』の編集委員3人（福井憲彦氏、林田伸一氏、工藤光一）がコーディネーターとなり、イギリス史家の長谷川貴彦氏、中国史家の岸本美緒氏、日本史家の成田龍一氏に報告を、イタリア史家の北原敦氏にコメントを、フランス史家の高澤紀恵氏に司会を担っていただいた。以下には、このシンポジウムの趣意書を掲げておこう。

社会史研究が、日本の歴史学界に大きな意味を持ち始めたのは、1970年代後半のことでした。それまでの歴史学とは、対象のみなら

ず、歴史認識や研究方法をも異にする歴史学の台頭といえることができるでしょう。そもそも、問題意識が異なり、叙述の方法も異なる歴史学の始動です。

このことは、ことばを換えれば、この時期に、歴史学の自己点検の営みが開始されたということでもあります。歴史学とは、どのような営みであるか、ということへの根底からの問いかけと、その実践です。

このとき、社会史研究を主導し、歴史学の自己点検の営みを実践した一人に、二宮宏之さんがいました。二宮さんは、フランス史を軸にしながら、広く歴史学全般に目を配り、その革新を試みました。

二宮さんの視野と射程は、歴史学から、さらに他の学知にまで及んでいます。〈いま〉との緊張感を持ち、〈いま〉を問いつける歴史学でした。

二宮さんの実践は、いまや多くの歴史家たちにとって共通の基盤となり、出発点になっています。とともに、まだまだ検討途上に残されていることもあります。近年、あらたに文化史研究が提起されているのは、その一つの証左と思われます。

21世紀初頭の〈いま〉もまた、こうして歴史学の自己点検がなされている時期といえることができるでしょう。このとき、二宮宏之さんの歴史学をあらためて検討し、その作法（さくほう）を考察することには大きな意味があると思います。

こうした問題意識から、『二宮宏之著作集』（全5巻、岩波書店、2011年）の編集にたずさわった三名がコーディネーターとなり、別記〔省略〕のようなシンポジウムを開催することにいたしました。二宮宏之さんとは世代を異にし、また足場を異にする方たちを報告者とし、大いに議論したいと思います。二宮

10 はじめに

宏之さんの歴史学を論じることを通じての、
「歴史からの問い／歴史への問い」の営みで
す。みなさまがたのふるってのご参加を期待
いたします。

このシンポジウムには、幅広い年齢層から 200
名近い方々が参加してくださった。とくに若い世
代の参加者が目立ったのは喜ばしいことであっ
た。今後も二宮宏之氏の歴史学をどう継承してゆ
くかが様々に議論されてゆくことであろう。この
シンポジウムがそうした議論への刺激となるこ
とを期待している。

(くどう こういち・東京外国語大学大学院総合国際学研究院)